

〈資料〉

看護学生がもつ対児感情と親性準備性

— 小児看護学学習前後の変化 —

Nursing Students' Emotions Childcare-Comparison and Readiness for Parenthood

— Changes before and after Pediatric Nursing Study —

宮良淳子・高田理衣

Junko Miyara and Rie Takada

要 旨

本研究は、岐阜県内のA大学看護学生（学習前75名、学習後66名）を対象とし、小児看護学学習前後の学習進度と、子どものイメージや養育に対する考え方の関連について明らかにすることを目的とした。方法は、乳児に対して抱く感情について「対児感情尺度」を用い、子どもに対する親としての役割を遂行するための資質は、「親性準備性尺度」から養育役割因子9項目を用いて調査した。その結果対児感情は、肯定的な接近感情の「いじらしい」、「みずみずしい」の項目と、否定的な回避感情の「あつかましい」、「なれなれしい」、「めんどくさい」、「わずらわしい」、「うっとうしい」の項目で、親性準備性（養育役割因子）では、「子どもが好きだ」、「赤ちゃんを見ると、あやしたり笑いかけたりする」の項目で、学習前に比べ学習後に有意に高い得点を示した。しかし、学習後も子どもとかかわる事に不安を感じている学生が多いことから、肯定的な対児感情や親性準備性の獲得を促す支援の必要が示唆された。

キーワード：看護学生、対児感情、親性準備性、小児看護学

I. はじめに

厚生労働省の人口動態統計（概数）によると、平成23年の合計特殊出生率は1.39と前年から横ばいであったが、出生数は前年比2万606人減の105万698人と過去最少となった。少子化に加えて、核家族化の進行や地域社会での人間関係の希薄化などの社会情勢により、子どもと接したことの少ない若者が増えており、看護学生においても同様であることが推測される。

子どもを育む際の基盤となる対児感情とは「乳児に対して大人が抱く感情」のことであ

り、この感情は子どもとの相互作用の中で発達するもの（大野・柏木，1999）である。また、親性準備性も自身の乳幼児期から青年期までの体験を通して育成されていくものである（岡本，古賀，2004；佐々木，小坂，中井他，2010；牧野，1989）が、身近に子どもと接する機会が減少していることから、若者たちが日常の社会生活の中で自然に対児感情や親性準備性を発達させていくことは難しくなっているのではないかと思われる。

小児看護には、病気の子もだけでなく、すべての子どもが健やかに成長・発達できる

ように必要に応じて養育者を援助・支援していく役割が期待されており、自身の対児感情や親性準備性は看護者としての援助の質に関連することが考えられる。看護学生の対児感情の学習進度に伴う変化を調査した報告は散見される（北村，2012；小玉・近藤・松宮・金子，2013；光貞・二宮・長川，2011；植村・榮・松村，2009）が、親性準備性の変化について調査した報告は見当たらない。

そこで、小児看護学を学習前と学習後の看護学生の対児感情および親性準備性について調査を行い、学習進度による子どものイメージや養育に対する考え方の変化を明らかにし、子どもをひとりの人間として尊重した関わりができる力を育成するための基礎的資料としたいと考え、本研究に着手した。

II. 研究目的

本研究は、看護学生が小児看護学学習前後の社会生活や学習進度によって、子どものイメージや養育に対する考え方の変化について、対児感情および親性準備性の調査によって明らかにすることを目的とする。

III. 用語の定義

対児感情：花沢（2001）の対児感情尺度に示される子どもに対する感情であり、「あたたかい」、「明るい」などの接近感情、「よわよわしい」、「なれなれしい」などの回避感情を含む。

親性準備性：子どもが将来、家庭を築き経営していくために必要な親としての資質、及びそれが備わった状態。

IV. 研究方法

1. 対象及び調査期間

岐阜県内のA大学看護学生の小児看護学学習前（2011年10月，75名），学習後（2012年8月，66名）を対象として実施した。

2. 調査方法

自記式質問紙調査の内容を資料1に示す。小児看護学の講義を開始する前週に、研究の目的と倫理的配慮について説明した後、調査用紙を配布した。回収は無記名とし、対象者が封筒に質問紙を密封した上で準備した回収箱に投函してもらった。

また、学習後は小児看護学概論の単位を修得し、小児看護援助論の最終講義を終了した週に、前回と同様の方法で無記名の自記式質問紙調査を実施した。

子どもとの接触体験は、乳幼児期から学童期の子どもの日常生活の世話を中心とした9項目とし、1点～4点を配した4件法で回答を得た。

対児感情は信頼性・妥当性の検証された既存の「対児感情尺度」（花沢，2001）を使用した。本尺度は、子どもに対する肯定的な感情を示す14の接近項目と否定的な感情を示す14の回避項目から構成されており、0点～3点を配した4件法で回答を得た。

親性準備性については、既存の「親性準備性尺度」（岡本・古賀，2004）のうち養育役割因子9項目を用い、1点～5点を配した5件法で回答を得た。なお本尺度は青年期男子にも使用可能な尺度であり、信頼性について検証されているものである。

3. 分析方法

統計解析はSPSS Statistics19を用い、属性については記述統計を行った後、保育体験実習の体験の有無と小児看護学への興味、小児

看護学への興味・子どもとかかわる自信について χ^2 検定を行った。また、対児感情および親性準備性の各項目の平均について t 検定を行い、有意水準は5%未満とした。

4. 倫理的配慮

本研究は、中京学院大学研究倫理審査会に承認を得て実施した。学生には、研究協力者に対して、質問紙は無記名とし個人が特定されないようデータは記号化して処理を行うこと、途中で参加意思がなくなった場合は研究協力を中断することができること、研究終了後に質問紙はシュレッダーで廃棄し、パソコン内のデータも破棄すること、成績には関係しないこと等を口頭と文書で説明した。同意の確認はアンケートの提出をもって行い、同意が得られた学生を対象に実施した。

5. 小児看護学の授業の概要

目的・到達目標について表1に示した。開講時期は、小児看護学概論(2単位30時間)は2年次後期、小児看護援助論(4単位60時間)は3年次前期である。

V. 結果

1. 学習前の調査結果

結果を表2に示す。小児看護学学習前の回収率は66.7%、有効回答率は94.0%であった。性別は、男性6.4%、女性93.6%であった。保育体験実習を体験したことのある学生は57.4%であった。小児看護学の学習前に、小

児看護学について興味があると答えた学生は74.4%であり、子どもとかかわる自信がある学生は27.7%、不安な学生は72.3%であった。

保育体験実習の体験の有無が小児看護学への興味に関連するかを比較したところ有意差は認められなかった($\chi^2=3.34, df=2, p>.05$)。また、子どもとかかわることについての自信の有無が、小児看護学への興味に関連するかを比較したところ有意差は認められなかった($\chi^2=13.8, df=4, p>.05$)。

子どもとの接触体験についての結果を表3に示す。「幼稚園児や小学生の遊び相手」は、93.6%の学生が体験しており、「3歳ぐらいまでの幼児の遊び相手」は、78.7%の学生が体験していた。一方、子どもの日常生活の世話を体験している学生は、遊び相手を体験している学生に比べると少なく、「3歳ぐらいまでの幼児を半日以上一人で世話する」体験のある学生は27.7%、「3歳ぐらいまでの幼児をお風呂に入れる」体験のある学生は23.4%、「3歳ぐらいまでの幼児のトイレの世話をする」体験のある学生は32.0%であった。「赤ちゃんを抱く」体験は83.0%の学生がしているものの、「赤ちゃんを半日以上一人で世話をする」体験のある学生は14.9%、「赤ちゃんをお風呂に入れる」体験のある学生は10.7%、「赤ちゃんのおむつ交換」の体験のある学生は27.6%であり、赤ちゃんの日常生活の世話の体験は3歳ぐらいまでの幼児の日

表1 小児看護学の授業計画

小児看護学概論 (2年次後期)	小児看護援助論 (3年次前期)
目標 子どもの成長・発達に伴う特徴について学習し、小児看護の特性を理解する 到達目標 1. 子どもの成長・発達に伴う身体的・心理的・社会的特徴を理解する 2. 子どもの成長・発達に応じた援助および健康増進に向けての援助について理解する 3. 小児看護の機能と役割について理解する	目標 健康障害のある子どもと家族のQOLを高める療育環境について理解し、子どもと家族への援助の基礎的知識と技術を習得する 到達目標 1. 小児特有の疾患を理解し、子どもと家族の置かれている状況をアセスメントできる 2. 健康障害のある子どもと家族への必要な援助を考えることができる 3. 健康障害・発達段階に応じた看護技術を考えることができる 4. 現在社会に求められる小児看護の役割を理解する

常生活の世話の体験に比べるとさらに少ない状況であった。

表2 対象者の属性

	学習前 <i>n</i> =47		学習後 <i>n</i> =66	
	人	%	人	%
性別				
男性	3	6.4	12	18.0
女性	44	93.6	54	82.0
兄弟の数				
一人っ子	4	8.5	4	6.1
2人	28	58.6	36	54.5
3人	11	23.4	23	34.8
4人	4	8.5	3	4.5
保育体験実習				
体験なし	20	42.6	29	43.9
体験あり	27	57.4	37	56.1
小児看護学について				
興味がある	35	74.4	51	77.3
あまり興味がない	12	25.6	15	22.7
子どもに関ることについて				
自信がある	13	27.7	9	13.6
不安である	34	72.3	57	86.4

表3 子どもとの接触体験

	<i>n</i> =47	
	人	%
幼稚園や小学生の遊び相手		
したことがある	44	93.6
したことがない	3	6.4
3歳ぐらまでの幼児の遊び相手		
かなりしたことがある	37	78.7
したことがない	10	21.3
3歳ぐらまでの幼児を半日以上一人で世話をする		
かなりしたことがある	13	27.7
したことがない	34	72.3
3歳ぐらまでの幼児をお風呂に入れる		
かなりしたことがある	11	23.4
したことがない	36	76.6
3歳ぐらまでの幼児のトイレの世話をする		
かなりしたことがある	15	32.0
したことがない	32	68.0
赤ちゃんを抱く		
かなりしたことがある	39	83.0
したことがない	8	17.0
赤ちゃんを半日以上一人で世話をする		
かなりしたことがある	7	14.9
したことがない	40	85.1
赤ちゃんをお風呂に入れる		
かなりしたことがある	5	10.7
したことがない	42	89.3
赤ちゃんのおむつ交換		
かなりしたことがある	13	27.6
したことがない	34	72.4

2. 学習後の調査結果

結果を表2に示す。小児看護学学習後の回収率は100.0%、有効回答率は100.0%であった。性別は、男性18.0%、女性82.0%であった。保育体験実習を体験したことのある学生は56.1%であった。小児看護学の学習後に、小児看護学について興味があると答えた学生は77.3%であり、子どもとかかわる自信がある学生は13.6%、不安な学生は86.4%であった。

保育体験実習の体験の有無が小児看護学への興味に関連するかを比較したところ有意差は認められなかった ($\chi^2=3.49, df=4, p>.05$)。子どもとかかわることについての自信の有無が、小児看護学への興味に関連するかを比較したところ有意差は認められなかった ($\chi^2=8.36, df=4, p>.05$)。

3. 小児看護学学習前後の比較

(1) 小児看護学への興味・子どもとかかわることについての自信

小児看護学に対する興味の有無について、小児看護学を学習する前後で比較したところ、有意差はみられなかった ($\chi^2=1.19, df=4, p>.05$)。

また、子どもとかかわることについての自信の有無について、学習前後で比較したところ、有意差はみられなかった ($\chi^2=3.13, df=4, p>.05$)。

(2) 対児感情の平均値

対児感情についての結果を表4に示す。肯定的な接近感情の学習前は1.95、学習後が1.95であった。

小児看護学の学習前後で接近感情に差があるか *t* 検定を行った結果、「いじらしい」($t = -2.29, df = 11.6, p < .001$)と「みずみずしい」($t = -4.17, df = 10.8, p < .001$)について、学習前よりも学習後の方が有意に高い得点を示した。

また、否定的な回避感情は学習前が.64、学習後が.84であった。各項目について *t* 検定を行ったところ、「あつかましい」($t = -1.33, df = 6.9, p < .05$)と、「なれなれしい」($t = -1.33, df = 4.1, p < .05$)、「めんどくさい」($t = -1.75, df = 4.2, p < .05$)、「わずらわしい」($t = -1.87, df = 7.8, p < .05$)、「うっとうしい」($t = -2.33, df = 15.7, p < .001$)、につ

いて学習前よりも学習後の方が有意に高い得点を示した。

学習後の方が有意に高い得点を示した。

表4 学習前後の対児感情平均点の比較

	学習前 n=47		学習後 n=66		p
	M	SD	M	SD	
あたたかい	2.64	.54	2.58	.66	
うれしい	2.57	.65	2.46	.69	
すがすがしい	1.45	1.00	1.36	.97	
いじらしい	.36	.67	.71	.96	**
しろい	1.89	.96	1.24	1.07	
ほほえましい	2.74	.64	2.73	.60	
ういいしい	2.32	.93	2.20	.93	
あかるい	2.53	.62	2.39	.72	
あまい	1.33	1.19	1.23	1.08	
たのしい	2.45	.75	2.39	.70	
みずみずしい	1.55	1.12	2.35	.82	**
やさしい	1.83	.96	1.85	.93	
うつくしい	1.47	1.02	1.70	.94	
すばらしい	2.13	.99	2.14	.99	
接近感情平均	1.95		1.95		
よわよわしい	2.00	.93	2.03	.84	
はずかしい	.43	.83	.35	.62	
くるしい	.13	.34	.47	.77	
やかましい	.91	.86	1.11	1.01	
あつかましい	.17	.43	.30	.63	*
むずかしい	1.49	.93	2.11	.83	
てれくさい	.87	.88	.74	.81	
なれなれしい	.40	.83	.64	1.03	*
めんどくさい	.47	.58	.70	.80	*
こわい	.72	.83	1.42	1.01	
わずらわしい	.28	.62	.55	.91	*
うとしい	.17	.43	.44	.79	**
じれったい	.47	.69	.47	.71	
うらめしい	.49	.80	.45	.83	
回避感情平均	.64		.84		

* $p < .05$ ** $p < .01$

VI. 考察

子どもとの接触体験には、日常生活だけではなく、保育体験実習での体験が含まれていると考えられる。「赤ちゃんを抱く」行為は83.0%の学生が体験しているものの、子どもの日常生活の世話を体験している学生は少ない状況であることが明らかとなった。多くの学生の子どもの接触体験は、養育の視点での関わりではなく、「抱く」、「遊び相手になる」といった表面的な関わりでの体験であった。子どもとの接触体験の少ない学生にとって、子どもと接し看護を行うということは脅威であり(西田・北島, 2005)、小児看護学実習において学生が抱える困難感、子どもとの関係づくりへの不安や、言語以外のコミュニケーションに対する戸惑いである(西田・北島, 2003)。一方で、子どもを好きだと思ふ肯定的な感情が子どもに対する興味や関心につながり、世話をしたいという意欲につながる(高橋・高梨, 2000)との報告がある。

本研究の対象者は、対児感情の肯定的な接近感情の得点が高く、否定的な回避感情の得点は低いことから、肯定的な感情を小児看護に対する興味・関心につなげ、看護に対する意欲が育まれるよう支援していくことが必要である。

学習前後での対児感情の変化をみると、学

(3) 親性準備性(養育役割)の平均値

親性準備性についての結果を表5に示す。小児看護学を学習する前後で親性準備性(養育役割因子)に差があるかについてt検定を行った結果、「子どもが好きだ」($t = -.79$, $df = 75.8$, $p < .05$)と「赤ちゃんを見ると、あやしたり笑いかけたりする」($t = -.92$, $df = 83.1$, $p < .05$)について、学習前よりも

表5 学習前後の親性準備性平均点の比較

	学習前 n=47		学習後 n=66		p
	M	SD	M	SD	
子どもが好きだ	4.32	1.13	4.47	.77	*
子どもと一緒に遊ぶのは楽しい	4.30	1.10	4.45	.85	
将来、子どもを育ててみたい	4.49	1.06	4.53	.85	
子どもを見ていると優しい気持ちになる	4.53	.91	4.52	.77	
赤ちゃんを見ると、あやしたり笑いかけたりする	4.34	1.09	4.52	.85	*
子どもはめんどくさい存在だ	2.02	1.21	1.89	1.05	
子どもの成長の仕方や子育てについて学びたい	4.23	.81	4.21	.85	
将来、自分が育児をするなんて考えたこともない	2.19	1.23	2.02	1.18	
育児は楽しいと思う	3.94	1.01	3.89	1.04	

* $p < .05$

習前に比べ学習後に、接近感情「みずみずしい」の得点が高くなっていった。これは小児看護学を学習することにより、成人に比べて子どもは体重に占める体液の割合が多いという知識を得て学生の認識が高まり、イメージにつながった結果であることが推察される。光貞他（2011）の報告では、母性看護学の講義・演習後に接近感情が高くなっており、肯定的な接近感情の高まりには、小児看護学だけでなく他科目との相互作用も考えられる。

有意に得点の高くなった回避感情は、小児看護学の学習をしたことにより、子どもの行動特性や子どもの反応を具体的にイメージできるようになったことも関連し、そのような感情の動きにつながったのではないかと考えられる。また、女子大学生より男子大学生のほうが子どもに対する否定的な回避感情が有意に高かったとの報告（安積，2008；羽田野・門脇，2004）もあり、この要因としては子どもとかかわる機会が少ないことがあげられている（北村，2012）。実際に子どもと接している大人たちは、常に子どもに対して肯定的な感情だけを抱いているのではなく、時として子どもの反応によっては否定的な感情をもつこともある。それは決して責められるべき感情ではなく、一時的にそのような感情を抱くことを認めていくことも重要である。

親性準備性は、子どもに対する親としての役割を遂行するための資質や準備性であり、自身の乳幼児期から青年期までの体験を通して育成される（岡本他，2004；佐々木他，2010；牧野，1989）。親性準備性についても、男子大学生に比べて女子大学生が獲得しており（安積，2008；羽田野他，2004）、関連要因に「幼い子どもとの接触体験」があった（羽田野他，2004）との報告がある。

本研究では、小児看護学の学習前に比べ、学習後は「子どもが好きだ」の得点が高くなっており、これは小児看護学概論や小児看護援助論の講義や演習を通して、子どもの模擬人形と触れ合い世話をする経験をしたことや、DVDの視聴などが子どもと触れ合うことの疑似体験となり、子どもに対する肯定的な感情が高まった結果ではないかと推測された。

「赤ちゃんを見ると、あやしたり笑いかけたりする」の得点が学習後に高くなっており、学習によって子どもに対する肯定的な感情や関心が高まったことや、子どもの反応を具体的にイメージできるようになったことが、実際に子どもに接近しかかわるという行動につながったのではないかと考える。

看護者としての養育観や態度は、小児看護の質に影響すると考えられるため、肯定的な対児感情や親性準備性の獲得を促す必要がある。肯定的な対児感情をもっているほど親性準備性「養育役割」の得点が高い（宮良・神徳，2012）事から、親性準備性を高めるためには子どもへの関心を深め、肯定的な子ども観を育てることが重要であると考えられる。

講義や演習では、子どもの成長発達や特性をイメージできるよう、模擬人形を用いながら世話をする経験を意図的に取り入れるとともに、視聴覚教材を用いて、発達段階に合わせた関わり方や子どもの反応に対する理解を深める必要がある。子どもとかかわることに不安を感じている学生が、自身の子どもとかかわりをイメージできるよう、自由に何度でも教材を視聴できる環境を整えておくことも必要である。

臨地実習では、子どもの発達の特徴や、子どもとの関わり方について学びを深めることができるよう、学生が子どもとかかわる機会

を増やし、子どもとの関係づくりをサポートする必要があると考える。処置やケア・遊びなどの具体的ななかかわりを通して、子どもとの関係づくりに努めるとともに、子どもをありのままに受け止めることの重要性と、子どもの人権について学ぶことができるよう、教員や臨地実習指導者が支援的にかかわる必要がある。

VII. 結論

本研究において、以下のことが明らかになった。

- 1) 小児看護学を学習する前の多くの学生の子どもの接触体験は「抱く」、「遊び相手になる」といった表面的なかかわりであり、乳児期～幼児前半期の子どもの日常生活の世話を体験している学生は少ない状況であった。
- 2) 対児感情に関しては、肯定的な接近感情の「いじらしい」、「みずみずしい」と、否定的な回避感情の「あつかましい」、「なれなれしい」、「めんどくさい」、「わずらわしい」、「うっとうしい」について、学習前よりも学習後の方が有意に高い得点を示した。
- 3) 親性準備性（養育役割因子）のうち、「子どもが好きだ」、「赤ちゃんを見ると、あやしたり笑いかけたりする」について、学習前よりも学習後の方が有意に高い得点を示した。

日常の社会生活の中で子どもとかかわる体験が少なく、小児看護学を学習した後も、子どもとかかわる事に不安を感じている学生が多いことから、実習環境を整え支援的にかかわることで、肯定的な対児感情や親性準備性の獲得を促す必要がある。

VIII. 研究の限界と今後の課題

本研究は、看護学生の小児看護学学習前と学習後の対児感情および親性準備性の変化を明らかにするために調査を行った。小児看護学学習前に比べ学習後は、対児感情の肯定的な接近感情は「いじらしい」、「みずみずしい」と、否定的な回避感情は「あつかましい」、「なれなれしい」、「めんどくさい」、「わずらわしい」、「うっとうしい」について、親性準備性は「子どもが好きだ」、「赤ちゃんを見ると、あやしたり笑いかけたりする」について有意に高い得点を示した。しかし、調査対象が岐阜県内の1大学に限定されていること、さらに対象数（学習前75名、学習後66名）が少ないことや男女の比率の偏りというサンプリング上の問題を有していることから、本研究で得られた結果を一般化するには限界があると考えられる。関連する要因について、背景の違い等が結果に影響を及ぼすことが予測されることにより、調査内容を考慮する必要があると考える。今後は、関連要因や対象者数を増して検討をする必要がある。

謝 辞

本研究の趣旨に賛同頂き、調査にご協力くださいましたA大学看護学部学生の皆様に感謝いたします。

本研究は、平成22年度中京学院大学看護学部共同研究費の助成を受けて行った研究の一部である。

【文 献】

安積陽子(2007). 看護系・福祉系大学生の養護性の形成に関する一考察：性別と乳幼児接触体験との関連から. 甲南女子大学研究紀要, 創刊号, 23-28.

- 花沢成一(2001). 心理測定尺度集Ⅲ, 112-115, サイエンス社. 東京.
- 羽田野花美, 門脇千恵(2004). 青年男女における親性準備性と性役割タイプとの関連日本看護学会論文集: 母性看護, 35, 140-142.
- 北村万由美(2012). 少子化に影響を及ぼす要因の研究 大学生の意識調査から. 看護・保健科学研究誌, 12(1), 46-55.
- 小玉ひとみ, 近藤郁代, 松宮良子, 金子洋美(2013). 妊婦体験ジャケット着用による演習前後の対児感情の変化. 岐阜県母性衛生学会雑誌, 40, 40-45.
- 厚生労働省(2013-10-3). 平成23年人口動態統計(概数)の概況. <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou>
- 牧野カツコ(1989). 高校生の「親となることへの準備状態」と保育教育. 日本家庭科教育学会誌, 32, 51-59.
- 光貞美香, 二宮寿美, 永川トミエ(2011). 母性看護学講義・実習における看護大学生の対児感情の変化. 宇部フロンティア大学看護ジャーナル, 4(1), 45-50.
- 宮良淳子, 神徳規子(2012). 看護学生の親性準備性と対児感情との関連-小児看護学履修前-. 第32回日本看護科学学会学術集会講演集, 437.
- 西田みゆき, 北島靖子(2003). 小児看護学実習における学生の困難感. 順天堂医療短期大学紀要, 14, 44-52.
- 西田みゆき, 北島靖子(2005). 小児看護学実習での学生の困難感のプロセスと学生自身の対処. 日本看護研究学会雑誌, 28(2), 59-65
- 大野祥子, 柏木恵子(1999). 結婚・家族の心理学 父親であること-子どもの養育者としての役割-. 150, ミネルヴァ書房, 東京.
- 岡本祐子, 古賀真紀子(2004). 青年の「親性準備性」概念の再検討とその発達に関連する要因の分析. 広島大学心理学研究, 4, 159-172.
- 佐々木綾子, 小坂浩隆, 中井昭夫, 波崎由美子, 松木健一, 定藤規弘, 岡沢秀彦(2010). 青年期男女における親性発達と神経基盤の関係. ベビーサイエンス, 10, 46-65
- 高橋恵美子, 高梨信子(2000). 臨地実習による看護学生の子どもに対する関心の変化(1)-好感度調査からの考察-. 島根県立看護短期大学紀要, 5, 59-63
- 植村裕子, 榮玲子, 松村恵子(2009). 看護学生の学習進度に伴う母性意識. 香川県立保健医療大学紀要, 5, 13-21.

資料1 調査表

I 対児感情について

あなたは、赤ちゃんについてどのようなイメージをもっているでしょうか。
このアンケートは、乳児に対する感情の一般的様相を知るために行うものです。
下にある説明を読んで、ありのままにお答えください。
あなたは「赤ちゃん」を頭に思い浮かべた時に、どのような感じがしますか。
下の言葉でみた時に、どの段階にあてはまるでしょうか。
あなたの気持ちに合うところに○をつけてください。
-あまり深く考えないで、直感的に判断してください-

	その非 常にお り	そのと おりに 少し	そのと おりに 少し	そのと おりに 少し	そんなこ とは
1 あたかい	3	2	1	0	
2 よわわしい	3	2	1	0	
3 うれしい	3	2	1	0	
4 はずかしい	3	2	1	0	
5 すがすがしい	3	2	1	0	
6 くるしい	3	2	1	0	
7 いじらしい	3	2	1	0	
8 やかましい	3	2	1	0	
9 しろい	3	2	1	0	
10 あつかましい	3	2	1	0	
11 ほほえましい	3	2	1	0	
12 むずかしい	3	2	1	0	
14 てれくさい	3	2	1	0	
15 あかるい	3	2	1	0	
16 なれなれしい	3	2	1	0	
17 あまい	3	2	1	0	
18 めんどくさい	3	2	1	0	
19 たのしい	3	2	1	0	
20 こわい	3	2	1	0	
21 みずみずしい	3	2	1	0	
22 わずらわしい	3	2	1	0	
23 やさしい	3	2	1	0	
24 うっとりしい	3	2	1	0	
25 うつくしい	3	2	1	0	
26 じれったい	3	2	1	0	
27 すばらしい	3	2	1	0	
28 うらめしい	3	2	1	0	

II 親準備性について

現在の、あなたの「子どもに対する親としての役割を遂行するための資質」についてお聞きします。
あまり深く考えないで、直感的にこたえて下さい。

	あてはま るに非 常に	あては まる	どち らとも いえ ない	あて はまら ない	あて はまら なく
1 家族と一緒に食事をしたり、話し合ったりするのは楽しい	5	4	3	2	1
2 家族と一緒にいると、楽な気持ちになる	5	4	3	2	1
3 家族団らんに関わりを感じる	5	4	3	2	1
4 家族は私にあまり関心がないようだ	5	4	3	2	1
5 家族の中で言いたいことが言える	5	4	3	2	1
6 家族はお互いに精神的支えである	5	4	3	2	1
7 家族はお互いに信頼しているものだ	5	4	3	2	1
8 将来、自分が育ったような家庭にしたい	5	4	3	2	1
9 家族が心情を訴えてもまともにとりあわない	5	4	3	2	1
10 嬉しいことがあると家族に報告する	5	4	3	2	1
11 家族と一緒に過ごす時間を大切にしている	5	4	3	2	1
12 家族に心を開いて内面的な話をする	5	4	3	2	1
13 家族は、必要な時にいてくれる	5	4	3	2	1
14 私の家族よりも他の家族のほうがもっと幸せだと思う	5	4	3	2	1
15 家族は、いざというとき、頼りになる	5	4	3	2	1
16 緊張したり、どきまじしないで、自分の考えや考え方について家族と話し合うことができる	5	4	3	2	1
17 家族は、個々で抱えている問題についてお互い話さない	5	4	3	2	1
18 家族はお互いの話を聞いてやるのが大切だ	5	4	3	2	1
19 家族の前では素直にふるまわない	5	4	3	2	1
20 家族は一体感をもつことが大切だ	5	4	3	2	1
21 家族はお互いに理解しあうべきものだ	5	4	3	2	1
22 家族はお互いに思いやるべきだ	5	4	3	2	1
23 部屋・トイレ・お風呂など、家を清潔に保つことができる	5	4	3	2	1
24 ふとんを干すなどで清潔に保つことができる	5	4	3	2	1
25 きちんとゴミを出すことができる	5	4	3	2	1
26 衣服の整理・整頓ができる	5	4	3	2	1
27 将来、きちんと家事をこなす自信がない	5	4	3	2	1
28 衣類を清潔に保つことができる	5	4	3	2	1
29 庭があれば、きれいに手入れできる	5	4	3	2	1
30 家事は面白い	5	4	3	2	1

		あてはまる 非常に	あてはまる	どちらとも いえない	あてはまら ない	あてはまら ない まったく
31	料理や洗濯・掃除をすることは楽しい	5	4	3	2	1
32	植物の水やりができる	5	4	3	2	1
33	食器などの後片付けができる	5	4	3	2	1
34	できることなら家事はしたくない	5	4	3	2	1
35	家計のやりくりができる	5	4	3	2	1
36	ボタン付けなどの必要な繕い物ができる	5	4	3	2	1
37	食事を作ることができる	5	4	3	2	1
38	お年寄りが好きだ	5	4	3	2	1
39	お年寄りのことはよくわからない	5	4	3	2	1
40	お年寄りとうまくコミュニケーションをとる自信がない	5	4	3	2	1
41	お年寄りと一緒に過ごすのは楽しい	5	4	3	2	1
42	お年寄りの世話をすることに負担や重荷を感じる	5	4	3	2	1
43	お年寄りとうまく接することができない	5	4	3	2	1
44	お年寄りめんどくさい存在だ	5	4	3	2	1
45	お年寄りは何を考えているかわからなくて困る	5	4	3	2	1
46	お年寄りを見ているとイライラする	5	4	3	2	1
47	お年寄りを見ていると優しい気持ちになる	5	4	3	2	1
48	病院か施設でお年寄りの世話をしてみたい	5	4	3	2	1
49	必要であれば、介護しようと思う	5	4	3	2	1
50	高齢者や介護について学びたい	5	4	3	2	1
51	介護をすると、家事・家族の世話・仕事などに支障が出る	5	4	3	2	1
52	子どもが好きだ	5	4	3	2	1
53	子どもと一緒に遊ぶのは楽しい	5	4	3	2	1
54	将来、子どもを育ててみたい	5	4	3	2	1
55	子どもを見ていると優しい気持ちになる	5	4	3	2	1
56	赤ちゃんを見ると、あやしたり笑いかけたりする	5	4	3	2	1
57	子どもはめんどくさい存在だ	5	4	3	2	1
58	子どもの成長の仕方や子育てについて学びたい	5	4	3	2	1
59	将来、自分が育児をするなんて考えたこともない	5	4	3	2	1
60	育児は楽しいと思う	5	4	3	2	1

III あなたの属性について

		かなり したことがある	どちらかという と したことがある	どちらかという と したことがない	したことがない	機会がなかった まったく
1	赤ちゃんを抱く	5	4	3	2	1
2	赤ちゃんのおむつ交換	5	4	3	2	1
3	赤ちゃんにミルクを飲ませる	5	4	3	2	1
4	赤ちゃんをお風呂に入れる	5	4	3	2	1
5	赤ちゃんの衣服を着替えさせる	5	4	3	2	1
6	泣いている赤ちゃんをあやす	5	4	3	2	1
7	赤ちゃんを寝かしつける	5	4	3	2	1
8	赤ちゃんを半日以上一人で世話を する	5	4	3	2	1
9	3歳ぐらまでの幼児の遊び相手	5	4	3	2	1
10	3歳ぐらまでの幼児に食事をさ せる	5	4	3	2	1
11	3歳ぐらまでの幼児をお風呂に 入れる	5	4	3	2	1
12	3歳ぐらまでの幼児に着替えを させる	5	4	3	2	1
13	3歳ぐらまでの幼児のトイレの世 話を する	5	4	3	2	1
14	泣いている3歳ぐらまでの幼児 をなだめる	5	4	3	2	1
15	3歳ぐらまでの幼児を寝かしつ ける	5	4	3	2	1
16	3歳ぐらまでの幼児を半日以上 一人で世話を する	5	4	3	2	1
17	幼稚園や小学生の遊び相手をする	5	4	3	2	1
18	幼稚園や小学生を半日以上一人 で世話を する	5	4	3	2	1

19	性別	①男性 ②女性
20	あなたの兄弟数	①一人っ子 ②2人 ③3人 ④4人以上
21	弟の存在はありますか	①いない ②いる
22	妹の存在はありますか	①いない ②いる
23	身近に3歳までの幼い子の存在は ありますか	①いない ②いる
24	中学や高校での保育体験実習 (ふれあい体験)	①体験なし ②子どもの世話と一緒にあそんだ ③主に見学であった
25	小児看護学について	①興味がある ②どちらとも言えない ③あまり興味がない
26	子どもについて	①興味がある ②どちらとも言えない ③あまり興味がない
27	子どもと関わることに ついて	①興味がある ②どちらとも言えない ③あまり興味がない

☆☆アンケートはこれで終了です。ご協力、ありがとうございました。☆☆